
連作・四季と少女とタロットカード

紫野蒼紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連作・四季と少女とタロットカード

【Nコード】

N9451Y

【作者名】

紫野蒼紅

【あらすじ】

恋に悩める少女と、映り行く時間の四季と、未来を示す神秘のタロット。それらを御題とした21の話達をどうぞ、あなたに。

PI・気がつけば夏だった(前書き)

この作品はR15です、精神的に。

p1・気がつけば夏だった

とにかく 俺は 気づいたら 夏だった！（透明少女／ナンバー
ガール）

唐突だが忘れられない恋ってあるよな？

甘酸っぱくて切なくて一番燃え上がって、でも叶わない事が多い
可愛そうな初摘みの果実だ。どんなに孤独を気取っても何かに対し
て人間ってというのは恋する性質があるんだと……彼女がいつてた。
俺もカネガネ同意だ。なぜなら恋したら人間変わっちゃうんだ、物
語の王子様でも残酷なやつでも屑でも犬でも蛙でも幽霊でも果ては
神様でも、古来から恋をすることで心を持つ生物はよくも悪くも変
わったんだよ。影響するのは遙か昔でも遙か未来でも、今でも影響
する。魔法少女とかフシギパワーの類は俺が推測するにはこの燃え
上がる変な物体から放出されてるに違いない……おっとすまない話
が逸れた。

俺にも忘れられない恋ってやつがある、正確にはあったのだが。
キラキラして眩しい、今の俺を繋ぎ止めて離さない恋ってやつが。
まあそんなものはどうでもいいんだ。とにかくこれから語るのは海

の日も近い或る夏の話だ。もちろん俺の話だ。
え？その夏の話にさっきの話がどうかかわるんだと？……察せよ、
これは恋について真面目に考える話なんだよ。

『魔法スズメ』

男ははふと、キャンバスを走らせる筆を止めた。

肩で大きく息をし、絵の具で汚れた手で額の汗をぬぐう。目の前のキャンバスは何回も描きなおしたようでごちゃぐちゃと練りこんだような画面になっている。四月から描き始め、早数ヶ月。少し早い夏が顔を出したのにも関わらず今だ進展のないキャンバスに、男は深いため息をついた。

男の名前は小野寺雅。独身四拾四歳で小さな馬小屋のようなアトリエで絵を描く事を仕事としている。

子供の頃からどこか人付き合いが悪く、愛想もよくななく、気がつけば朴念仁な男と渾名されて、流れに流されるうちに、寂れた田舎のはずれに住んでいた次第だ。そんな生活だが本人は特に苦勞もしておらず、人に邪魔されない生活で満足だという。人と触れ合わず自分の世界に没頭することは、彼にとってこの上ない至福だからだ。

気がつけば天窓から覗く日は高く、少し空腹感を覚えたのか、絵筆を色で汚れた机に置くといそいそと一階のキッチンへと向かう。手にこびり付いた絵の具を、冷たい水で丁寧に洗い落としていく。

今日のお昼はどうしようか、と考えていた所に、ふと聞く事はな
いと思っていた音が鳴る。突然の事に少々不安を覚えながらも、悪

戯ではないかと玄関へと向かう。嘘ではないと主張するように来客用のベルが鳴り続けている。来客は郵便屋の青年だけだと思っていたが、不思議な事もあるもんだと雅和は思った。

ドアに手をかけ、ゆっくりと開く。相手の姿を見たたん、やはりまた嘘ではないかと疑わざる終えなかった。

「あの……えつと」

そこに立っていたのは、田舎の風景に全く溶け込んでいない、ピンク色の髪を長く伸ばした、いかにもアニメのキャラクターを抜き出したようなフリルたっぷりの服装の女性だったのだ。

「お久しぶりです、オジサン」

たずねてきた彼女はどうかやら雅の事を知っているようだった。

幸と名乗るピンク髪の女性は、どこか落ち着かない様子で部屋の中をみている。すらっと伸びる白い足とふりふりの沢山ついた趣味の悪い服と、染めているのか少し痛んだ髪、こんなに暑いというのにきつちりと化粧まで決めていかにも都会系の女の子だ。無論雅は彼女に見覚えはない。だがその顔立ちには懐かしさを感じる。

先ほどは彼女の必死な頼みと気迫におされ、つい家にながらせてしまったが、幸は一体自分に何の用があつて来たのか分からない。そもそもこんな俗世感溢れる女性と自分との間に因縁などないはずなのだ。なのにどうしてこの女は自分を訪ねて来たのか、尋ねれば幸は照れたような顔をしながら

「あらやだオジサン、私の事忘れちゃったんですか？」

昔っから物忘れが酷いんだから、とくすつと笑うばかり。肝心なことに關しては話さないのはこの女の策略だろうか。

しかし、自分のことを親しげに『オジサン』と呼ぶ彼女が赤の他人とは思えない。おそらく幸と自分は最低一回はどこかであつたのだろう。そうでなくても、彼女とは何か接点があるはずだ。

しかし、何度彼女の白く化粧された顔を見ても全く思い出せない。知り合いに髪の毛がけばけばしいピンク色の女がいた覚えがないし、こんな服の趣味の女がいた覚えもない。人違いなのではないかと雅は思い始めたが、幸にそう伝えると

「まさか、オジサンみたいな人間違えるはずがないです、名前だつてちゃんと確認したんだから！」

確かに、雅という名前が被るとは思いにくい。だとしてもやはり彼女の事が思い出せない。何か良からぬ事を企んでいるのではないかとも思ったが、彼女の真つ直ぐすぎるまでの主張の強さにそれはありえないか、とすぐに考えを捨てた。

そうして何回も同じようなやり取りを繰り返したが、思うような返答は帰ってこなく、どうにも埒があかないので雅は幸に用事を尋ねる事にした。その用事に難癖をつけて追いつ返すことにしようと考えたのだ。が、きらきらと顔を光らせながら、幸が突然鼻先になにかを突きつける。それをみて雅は漸く幸が誰か思い出したのだった。

「この日記の約束、果たしに来たんです」

約十五年前、兄の家に一ヶ月ほど滞在していたとき。彼の家にいた内気で眼鏡で向日葵がよく似合う小さな少女。そう、兄の娘……姪の「みゆき」。

そしてもう一つ。そのとき気まぐれで描いたスズメの絵と誓約。

もうすっかりと忘れていたはずの夏の日の思い出が、モンスターになって今目の前にいる。

「私が大人になってアイドルになったら、結婚してくれるって約束！」

「……はあ」

雅は急に激しい眩暈を覚えた。

今、ヤカンがお湯が沸いたことを告げた。

ミトンをはめて火からあげる。質素な印象を受ける白いマグカップにインスタントコーヒーの粉を計りもせずに入れると、沸騰したばかりのお湯をマグカップへと注いだ。コーヒーを幸に差し出すと、自分も向かい合うように椅子に座る。幸が自分を見る視線は恋する乙女というよりも、真摯で忠誠心溢れる侍の目だ。正直、彼女と視線を合わせられない。

自分は正しいことをしていると信じ込んで行動している人間を見ていると、昔からどうにも腹のあたりがしゅくしゅくするのだが、彼女と視線を合わせると似たような痛みがする。早く自分の言いつの可笑しさに気がついて帰ってくれないだろうか、と淡い期待を抱くばかりだ。

昔の約束をこの十五年間真に受けていたこの女：あまはみゆき天羽幸、本名・おのてらみゆき小野寺幸は、気まぐれで描いた『アイドルになって自分と結婚するという約束を忘れずにいたという。』

アイドルになった証拠は見せてもらった。雑誌の表紙に写る華やかな衣装をまとった彼女は、『小悪魔系アイドル』として売り出し

ているという。本当に美人なのだが、雅にはあまり魅力的に映らなかつた。

昔の幸は黒い髪を短く切つて、質素だが女の子らしい色合いの服のよく似合う素朴な少女だった。その頃の彼女のほうが、今のけばけらしい彼女より幾分かまじだったと雅は思うが、幸に伝える事はしなかつた。彼女の服は、写真できている服よりもうんと高い服だと気がついたせいかもしれない。

そして何度も何度も聞いたのだが、彼女は結婚について割と本気らしい、雑誌のインタビューにすら『将来結婚する約束をした人があるんです』と宣言してしまっている。よりもよつて、血のつながつた相手である自分との結婚を。

法律上は確かにこの結婚に問題は無いらしい。だが、普通結婚は双方の同意とか愛とか使い古されたプロポーズとか、相手の事を良く知つてからするべきだと、少なくとも雅はおもっている。だからこそ彼女の主張に不自然さを感じざるおえない。

どうしてそんな昔の約束を守る必要があるんだ、と幸に聞いてみる。すると彼女は不思議な顔をして、こう答える。

「私は約束は守るものと教わつたのですが、だめですか？」

「……」

あまりにも純粹すぎて、馬鹿馬鹿しすぎて、思わず溜息をつく。彼女が兄の娘だという事はこの際置いておく事にしよう。まず約束があつたとして。約束を破つたら針千本飲まされるところでも、好きでもないし長い時間過ごした訳でも無い相手とすぐ結婚しましよつとはならないだろう。そう話せば納得してくれると思つていた。

「でも、約束は約束ですよ、守らないと」

「あれは冗談のつもりだったといつてるだろう」

「え？でも約束結んだじゃないですか」

だが彼女の場合はちがった。約束が最上位に来ている。何をそんなにムキになってまで守るのか分からないが、一に約束、二に約束、三四飛ばして五も約束。どんなに理由を並べても約束を守ってほしいといってくる。どこをどう間違えたらこんな娘に育つんだ、親の顔が見てみたい……となつて、幸は兄の娘だったことを思い出す。

兄よ、なぜ貴方の娘はこんなにも話が通用しないのですか、と遠くに住む兄に念を送る、無論届くはずはないのだが。そうこうしているうちに幸が着てから一時間たっていた。一向に彼女は自分の主張を変える気はない。はたしてどういいくるめようか。そろそろ絵を描きたいのだが、と思ったとき、ふとアイデアが降ってきた。

そうだ、約束を守らなければならないのなら、約束させてしまえばいい！

さっそく実行しようとして雅は口を開く。なぜだか分からないが、心臓が飛び跳ねそうであまく言葉がつかまらない。

「幸、分かったよ」

「じゃあ、すぐに判子を……」

飛びはねんばかりに満面の笑みになると、フェミニンな柄の鞆から、昔ドラマで見た事のある紙を取り出そうとする。既に中は記入済みだ。なんて用意がいい奴なんだろうか。そうはさせないと素早く手で制してしまわせる。うまくつながらない言葉を、冷静になれと自分に言い聞かせながら紡いでいく。

昔から絵ばかり描いて自分の世界に閉じこもり、人と余り話さなかった雅には、こんなに長く人と話をするのも、自分の意思を伝えるのも常に心臓が高鳴る。

いわゆる、『友達のいない』タイプの人間だった。

「そのまえに！……一つ条件をつけさせてくれ。私もこのまま好きでもない相手と結婚しても困る。」

「な、なんですか？私何でもしますから」

予想通り彼女は不安げな表情で食いついてきた。彼女がまっすぐな性格に育ってくれてよかったと感謝せざるおえない。

そして、先ほどまでは直視できなかった彼女の目をみて、追い払うための渾身のアイディアを練り出すはずが

「いいか、夏が終わるまでに私を本気で惚れさせてみる、そしたら結婚してやる……って、え？」

選ぶ言葉を間違えた。

「えっ！！」

「ちょ、ちょっとまった今のは無しだ！」

「お、おじさま、私感激です……」

きらきら輝く彼女の視線が痛い。これは大変だ完全に勘違いしている。

というより、なぜさっきの台詞が口から出たのか分からない。今さっき雅は別のことを言おうとしたはずなのに、まるで魔法に掛けられたように口が勝手に動いたのだ。あんまりにもさらっと出てしまったことが驚きだ。

同時に、普段もう少し人と関わって会話しておけばと激しく後悔する。どうやって先ほどのことを訂正すればいいのか、全く持つて分からない。ただただ言葉で否定するが彼女の耳には何一つ届いていない。

悪あがきせど覆水盆に返らず、彼女はばあ、と癒されるような笑顔をふりまく。

「本当にそれでいいんですか！？私頑張りますね！」
「違う、間違いなんだあッ！！！」

遠くで鳴く蝉の声が雅を笑っているようなきがした。

気がついたら夏だった。そんな季節の話。

p1・気がつけば夏だった（後書き）

ぱちぱち！始まりました。まずは『夏とアイドルと恋人のカード』
ってことでどうしてこうなった系彼女の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9451y/>

連作・四季と少女とタロットカード

2011年11月28日07時57分発行